



まともなアナタに贈る、

あたしのまともな日常

一路 真実

1

カチツカチツ。

未読メールをすべて削除します。

はい。

カチツ。

「須藤さん。休憩入っいいいわよ」

「はい」

あたしは席を立つとすぐ、廊下へ飛び出した。ヒールの音を鳴らして、早足でトイレに駆け込む。

一番奥の個室。あたしの、居場所。

新卒で入社したあたしに待っていたのは、素敵な上司でもかっこいい先輩でもなく、大量のスハムメールだった。システムの全

くないあたしが、情報環境部に配属になって、ただ毎日パソコンの画面を覗き込んでいた時、さえない頭の禿げた上司が言った。

「須藤さん。プログラミングもできないの？」

だって、あたしは文系なのよ。この会社だって、食品の販売会社じゃないの。あたしは缶詰を抱えて、海外を飛び回る営業職を希望してたんですけど。

「私の長所はバイタリテイのあるところです。学生時代にアルバイトで参加した御社の缶詰販売も、私の売上成績が一番でした。国内だけでなく、海外でもこの能力は活かせると思います」

成績が一番だったっていうのはウソだし、英語なんて全く話せないけど。でも、やる気だけはあった。海外のバイヤーと値段交渉して、一日で三つの国を股にかけるような多忙な日々を送る予定だったのに。

「須藤さんにびつたりの仕事があるんだよね」

そう言って、ヤニに黄ばんだ歯を見せた上司があたしに与えた仕事。

それが、スパムメールの削除だった。

スパムメールと言えども、すぐに全部削除できるわけではない。中に重要なメールが紛れているからだ。業務に係のあるメールか

どうかを主にタイトルで判断する。中身をいちいち確認していると一向に進まない。必要なものとそうでないもの。それをふるいにかけていく。

あたしの部署には一日に数千通というメールが届く。ちなみにその七割がスパムメール。出会い系の勧誘ばかり。

最初はスパムと思った瞬間に削除していた。慣れてくると、徐々にその意味を考える。

「無料で簡単登録！」

「タダほど高いものはない、か」

削除しても削除しても、どんどん送られてくるメール。販売のシステムを作る前に、このスパムメールを排除するシステムを作れよ、と毒づく。しかし、能力のないあたしは何もできない。

「あなたを待っている人妻がいます」

「人妻でも何でもいいや。あたしを待っている人がいるんだったら」

カチカチとマウスのボタンを叩きつける。強く押してもたたくさん消えるわけではない。分かっているけど、またやってしまう。

「世界の巨乳美女と出会えます」

「いいね。出会いたいよ。巨乳美女」

頭の中にもやががかったようにぼんやりする。思考能力の低下だ。目の前がだんだんかすむ。パソコンの画面を見すぎているせいか、

もしくはこのタイトルのせいなのか。

「穴が開いていました」

「穴ね。穴」

削除ボタンを押そうとして、はっと気付いた。メールを開くと、缶詰に穴が開いていたという苦情だった。あぶない。後ろ頭をかきむしる。セットされていないぼさぼさの頭がさらに乱れる。スパム以外の残り三割のメールを見落としては、仕事をしていないのと同じだ。三割の原石を拾うために、あたしはここに座っているのだから。

突然、後ろでバリツと音がした。振り返ると、三十代後半、スッピンで会社に来ている田辺さんが、スナック菓子の袋を開けていた。黒ぶちの眼鏡の奥で、あたしをちらと一瞥すると、ぼりぼりとむさぼり食いながらパソコンの画面に戻っていった。彼女の鼻先にある訳の分からない記号で埋め尽くされた画面に、あたしはうんざりした。

全くもってこの係は良い人がいない。不潔な上司、さえない独身女性、額が汗ばんでいるオタクの男、時代錯誤な風貌のやせ細った男。そして、スパムメールと会話するあたし。隣の係も似たようなものだ。憧れのOL生活とは程遠い。おしゃれをする必要もないのだ。あたしは二時間置きに席を立つ。それも規則的に。相棒は悲しそうにあたしを見つ

める。

「思わず触りたくなるお尻☆」

「そうね。ありがとう」

そして、トイレの一番奥に入る。便座に腰掛け、頭を抱える。

あたしは何をやっているんだろう？

何のためにここにいるんだろう？

その姿勢で数十分したら、ようやくあたしが戻ってくる。だって、これでお金がもらえるんだっというじゃないの。へらへらして、何も考えずにひたすら余分なものを削除するだけ。それがあたしの仕事なの。

やっこの思いで立ち上がり、水を流した。

2

昼間はスパムと会話しているあたしは、夜になってもまともな人間との会話は無い。これが彼氏のいない、一人暮らしの悲しい女性の生活。

あたしは自宅に帰るとすぐ、ストックキングを脱ぎながらパソコンのスイッチを入れた。一日に何時間パソコンの前にいるんだろう、という疑問は最初の数か月で蓋をした。だって仕方がないもの。このままだとテレビに向かっ

て会話して、最終的には独り言で怒鳴り合っているようになってしまふ。

メールボックスを開く。そこにも排除できないスパムメール。

「入れたくなるアナル」

そっか。韻を踏んでるわけか。

家に帰っても相変わらず、スパムメールと会話だ。次のメールのタイトルを見た。

「チャットで素敵な恋人を見つけませんか」

思わず、削除の手が止まる。そして、あたしはメールを開いた。

それからだ。毎日帰ると、あたしはすぐにパソコンの電源を入れ、ツーショットチャットを始めるようになった。二人がチャット部屋に入ると、自動的に他の人が見られない仕組みになる。嫌になったら相手を閉め出すことができる。女性が一人で待機すると、次から次へと男性が入ってくる。

「いくら？」

「どういう意味？」

あたしはよく分からず、そう打ち返した。

「円ってこと」

会話の内容からすると、どうも隠語らしい。援助交際かと推測して、あたしは相手を閉

め出した。下手な鉄砲は数撃っても当たらない。男性がひっきりなしに出入りするからと言って、すぐに恋人が見つかるはずもなく、この手の奴ばかりが通り過ぎる。最初はまともかと思える奴も、最終的には「エッチな会話もオッケーですか？」ということになる。

そんな奴と利根的な会話を繰り返して、気付けば二時間経っていた。もうそろそろ止めようとしたとき、彼はやってきた。

「こんばんは」

これで最後にしようかと決めて、あたしはタイプした。

「エッチな会話はできないよ」

更新ボタンを押すと、文字がぱっと浮かび上がった。

「寝る前に普通の会話がしたいだけ」

あたしはちよつとにやける。そして、できるだけ早く返事を打つ。しかし、あたしのタイプは追いつかなかった。書き終わる前に、彼の言葉が浮かびあがる。

「今日は仕事だったの？」

それから、彼はあたしの仕事の愚痴を聞いてくれる存在になった。

職場にいる訳の分からない男性以外とも会話をしたのはいつ以来だろう。彼はい

つもあたしの心を支えてくれる。

「仕事がつらいよ」

誰かに聞いてもらえるだけでよかった。世界のどこかで、あたしを癒してくれる人が存在している。それだけでよかった。

「お疲れ様。ミカはよく頑張ってるよ」

あたしの本名は玲子。ミカはハンドルネームだ。仕事なんてみんな辛いんだよ、なんて言わないところが好き。

「ミカが近くにいたら、頭なでてあげるのに」

あたしは悶絶しながら、片手に持っていたビールをぐいと飲み干した。最近彼は純粹にあたしに会いたがっている。あたしも彼に会ってみたいと思う気持ちと現実を知る怖さが次のタイプを押しとどめる。何てレスを返そうと考えているうちに、彼が浮かびあがる。

「ごめん、ひいたかな？」

あたしはすぐに返事をした。

「全然。あたしもケイに会いたいよ」

3

カチッ。

「須藤さん」

カチッ。

「須藤さん」

カチッ。

「須藤さん」

あたしは肩を触られて、はっとした。

「あ、田辺さん。呼びました？」

背後に立っていた田辺さんの眼鏡がきらりと反射した。無造作に切られたショートヘアとやけに長めのスカートが、何とも言えない気持ちにさせる。でも、この人仕事でできるんだよなあとギザギザの前髪を見ながら思った。

「さっきから何度も呼んでるよ。三宅さんが手伝ってほしいって」

狭い分室は書類が散乱しており、ほこりをかぶった本が無造作に積み上げられている。その真ん中で、砂漠に突然生えた雑草のよう

に、ひよろひよろと三宅さんが立っていた。

「過去の書類で必要なものがあるんだけど、たぶんこの部屋のどこかに埋もれてるんだ」

三宅さんは、ほこりに消されそうな細かい声で概要を説明すると、さっそく足の踏み場のない書類の山をかき分け始めた。あたしもそれに倣って、本に手をかける。

書類が飛ぶという理由で窓も開けられず、ほこりの息苦しさに耐えながら彼の書類を

探す。

「須藤さん。入社して半年くらい経つけど、仕事慣れた？」

「……はあ、まあ」

あたしは曖昧に返事をしながら、いろいろな書類を端に積み上げる。スパムメールの削除に慣れるも何もあるもんかと内心とげが突き出したが、あたしに仕事のことを聞いてくれるだけましかと思いい、心をなだめた。

「大変な仕事だけど、重要だから。須藤さんのやってることは」

あたしは驚いて、彼の顔を見た。入社五年目の三宅さんは、係の中でもあたしと一番歳が近い。あたしの仕事での様子を他の誰よりも心配してくれていたのかもしれない。いつもつむぎ加減の彼は、書類を探すためにさらにうつぶわいて顔など全く見えなかったが、あたしは想像力でそれをカバーした。時代遅れのアイビーカーットの坊ちゃん刈りも、良家の御曹司のようなさらさらヘアに見えるなくもないし、顔の半分もありそうな角ばった瓶底眼鏡も、流行りの眼鏡のその先へ突き抜けているのだと思えなくもない。つまり、あたしは少しだけ彼にときめいたのだ。その時だった。目の端で書類をかき分けるように黒い物体がカサカサと動いて行った。「うわっ」

あたしは思わず、彼の背中に飛びついた。すると、彼はあたしを守るような格好で、その場にあった分厚い訳の分からない記号で埋め尽くされた本を取り上げ、黒い物体を何度か叩いた。

あたしはまた、想像した。あたしの手のひらの先にある彼の背中は、あまりにやせ細っていて骨骨しいけれど、いざというときは微力ながらあたしを全力で守ってくれるのだ、と。この手の向こう側にある、薄っぺらい肉の内部に秘められた熱を感じたくて仕方なかった。

分室での一件があつてから、あたしは何となく三宅さんを目で追うようになった。髪もかわいいゴムで束ねて出勤し、何か仕事上で三宅さんと接点がないか探すようにさえなっていた。

だけど、二時間置きにトイレへ駆け込む習慣はなくならなかった。朝の出勤時に挨拶をしたきり、帰るときまで誰とも会話しない日が続く。パソコンの前に座っているあたしに誰か気づいているのだろうかと思わずにはいられない。丸い卵を何度クリックしても、どんなに強く叩き続けても、殻にはひびすら入らない。トイレの狭い空間だけが、唯一自由になれる場所であることに変わりはない。

かった。

4

「じゃあ、駅前の銅像の下で待ってる。ポーターのポロシャツを着ていくよ」

あたしは待ち合わせ時間より早く着き、銅像が見える喫茶店でコーヒーを飲んでいた。バーチャルなあたしの心の支えとついに会うことになったのだ。緊張で吐きそうになる気持ちを抑えながら、あたしはポーターを探す。

待ち合わせ時間を十五分ほど過ぎ、あたしはついに痺れを切らして銅像の下へ行くことにした。カウンターを通り過ぎる時、あたしをしきりに見つめている人がいた。

「ミカちゃん？」

体を横断するように、青く太いラインが入ったポロシャツを着ている。ケイだった。

あたしはネオンの街をうきうきしながら歩いていた。だって、あたしたちは考えも行動も同じじゃないの。喫茶店で待ち伏せして、こっそり銅像を見ているなんて。こんな近くにいる、同じ距離を同じ時間眺めているなんて、

て、これは運命なのではないかと思っていた。

あたしたちは、そのまま喫茶店で話をしていた。ケイは年齢があたしより二十近く離れていたが、見た目は若かった。というか、派手に若作りだった。焼けた肌と茶髪、ゴールドのアクセサリーが顔の皺とアンバランスだ。でも、そんなことはどうでもよかった。あたしは、彼のごつごつした手ばかりが気になり、盛り上がった指の関節がしなやかに動く様子を眺めていた。あの指は今までどんなふう

に人に触れてきたのだろうと思いついたとき、彼が言った。

「そろそろ行くか」

彼は喫茶店を出ると、細い路地へ歩いて行く。あたしは言った。

「これから、どこに行くの？」

彼は突然、大きな手であたしの手を包み、引っ張るようにして強引に歩き始めた。あたしはその行為にドキドキし過ぎて、気色悪いピンク色の電飾の灯った店がラブホテルだったことに気付かなかった。

何だかもうどうでもよかった。あたしの体はあたしのものであって、でももうあたしのものでなくて、彼のものでもなくて、夜の闇のものなのだ。昼間、物体として存在しているあたしだって、誰のものでもないし、誰に

も必要とされていないのだ。だからこそ、少しでも夜のあたしを必要としているのなら、彼が少しでもあたしを求めているのなら、それだけでもいいのではないかと思った。

行為が終わって、ケイは言った。

「チャットの人と会うなんて、やる以外にどんな目的があるの？」

でも、ケイと関係を持ってしまったことに対して、あたしは全く後悔していない。その後、音信不通になって、あたしは心の支えを失ってしまったけれど、あの時、彼があたしの手を掴んで離さなかったことは事実なのだから、もうそれ以上何も必要ないと思えた。

それは言い訳なのかもしれない。物事を正当化しようとする、あたしの屁理屈なのだろう。

深夜二時、あたしは近所の公園のベンチでうずくまっていた。夜の徘徊が止まらない。気付いたときには外に出てから何時間も経っている。歩きまわっていることもあれば、こうしてただ座っていることもある。バーでお酒を飲んでいることもある。

あたしは、夜の闇に浸食されているのだ。

あたしの心臓に針を刺したら、夜の闇がどくどくと流れ出てくるだろう。誰かに承認されたいとか、誰かと一緒にいたいとか、そ

ういうレベルをもうとっくに超えている。心の穴はふさがらないところまで押し広げられてしまい、夜の闇を溢れ返らせる。何かを求めているけれど、何を求めているのか分からずに、衝動をただ垂れ流し続けるのだ。

あたしはチャットで知り合った、ケイ以外の男性たちと会うことを繰り返して、その後も気色悪い電飾の下に何度も立ち続けた。

5

その日もまた、あたしはどこの誰かも分からないオヤジと会っていた。夜の黒い力に負けまいとして赤々と灯るネオンの街を歩く。太って息苦しそうに笑う四角い顔があたしに近づく。男があたしの肩に手をかけ、引きずり込むようにホテルへ入ろうとした時、目の端で明るい白い影が見えて、あたしは顔を向けた。そこに立っていたのは、三宅さんだった。

三宅さんは、会社帰りに飲んだ様子で赤い顔をしていた。会社では見せないような、あたしの派手な格好に驚いて、黙って見つめ続けていた。厚い瓶底眼鏡の奥の細い垂れ目が、見開かれ、あたしはその目に気付いたと

きにとっさにオヤジの腕を振り払った。オヤジはよろめいて、再び手をかけようと巨体を揺らして近づき、あたしの腰を引き寄せた。へらへらして黄色い歯を見せ、脂ぎった顔を近づける。

「いやっ」

あたしはオヤジを突き飛ばした。すると、三宅さんがオヤジとあたしの間に立ちふさがり、言った。

「やめろよ」

オヤジは見知らぬやせ細った男が出てきたことに対して、怒り狂って奇声を上げた。三宅さんは、冷静に

「彼女が嫌がってるから、やめてください」

と言った。いつもぼさぼさの髪の毛をしているあたしは、その時やけに力の入ったカールにしている、会社では履かないようなミニスカートにピンヒールという服装だった。メイクもごてごてと塗りたくって汗で部分的にはがれ落ちていく。こんなあたしは三宅さんに助けてもらえるような人間ではない。こんな格好のあたしがとてもみつともなく思えて、あたしは三宅さんの背中に隠れて恥ずかしくてたまらなかった。もう顔を合わせられないと思った。できることならば、三宅さんが振り返らずそのまま去ってくれたら、と願った。オヤジが怒鳴った。

「何言ってるんだ。その女が誘って来たんだぞ。タダでやらせてくれるって」

オヤジはそう言うのと、周りを気にしながらこちらに何かを叫んで走って行ってしまった。

あたしの願いは聞き入れてもらえなかった。三宅さんはゆっくりとあたしの方を振り返ったのだ。普段と全く違う娼婦のような格好のあたしを下から上へ注意深く目で点検していく。そして、最後にあたしのどろどろに溶けた顔を軽蔑したように見つめた。

「須藤さんが悪いよ。そんな服装でこんな街を歩いてるなんて。僕は君を理解できない」

そして、歩き出そうとして顔だけをこちらに向け、語気を荒げて言った。

「汚いよ」

去っていく彼の背中を見て、あたしは思った。三宅さんに嫌われたのだな、と。

あたしは大きな溝に落ちていくように思えた。三宅さんは、あたしが派手な格好で街を歩いて、変な中年男性にホテルへ連れ込まれそうになったことに対して、言ったのだ。そういうあたしが「汚い」と。

しかし、それ以上にあたしは汚れているのだ。実際にあのオヤジが言ったことは正しい。あたしはこれまで妙な男と繰り返し寝てい

たのだ。あたしは三宅さんが感じる汚さのはるか向こうに存在している。

泣くことも笑うことも何もできずに、あたしはピンヒールで駆け出した。三宅さんが言った汚いという言葉が繰り返し、頭に浮かぶ。しかし、今のあたしはそんなレベルではない。三宅さんの言葉の体系にある「汚い」という形容詞では表わされない。あたしはもう、彼の中には存在できないのだ。

6

気付いたら、あたしは真っ暗な会社の中に入ろうとしていたのだ。その時、誰もいないだろうと思っていた廊下で声をかけられた。

「須藤さん？」

それは、あたしの後ろの席に座っている田辺さんだった。

「こんな時間にどうしたの。しかも……」

田辺さんはあたしの格好を見ると、ぎょっとした。独身で仕事だけに命をかけている田辺さんは、こんな時間でも真っ暗な会社に一人残って仕事をしていたのだ。あたしは彼女の姿を見ると、ようやく涙が出てきた。

溢れ出た涙は止まることを知らないくらいに流れ続け、あたしは廊下に突っ伏した。

車の中は、田辺さんの雰囲気には似つかわしくないほど甘いイチゴの香りが充満している。あたしは彼女の意外な少女性を感じた。あたしはもう泣いてはいなかった。助手席の窓から暗い道路を眺め、サイドミラーに映る、化粧が落ちて真っ黒な目をしたあたしをぼんやり見ていた。田辺さんは何も言わず、夜の森へ入って行った。

車を停めると、外に出るよう指示された。車のドアを閉める。ピンヒールの踵が土に少しめり込むのを感じる。「こっち」という声の方を向くと、目の前に広がっていたのは、真っ白なしぶきを上げる滝だった。

「辛いことがあると、この滝を見に来るのよ」

田辺さんは橋の中ほどまで来ると、そう言いつつ欄干を両手で握りしめた。あたしは田辺さんの左側に立ち、滝から時折飛んでくる小さな水しぶきのシャワーを顔に感じている。田辺さんは言った。

「私はあるが羨ましいよ」

あたしは田辺さんを見た。化粧の無い白い肌が透き通っている。

「私はあるみたいなのに、はじけたくてもできない。はじけたい願望はあるのに、それをど

こにぶつけたらいいか分からないのよ」

あたしは両手でごしごしと顔を擦った。厚く塗った化粧がはげるように。少しでも素顔のあたしに戻るように。だけど、実際は黒く塗ったマスクがさらにどろどろと溶けて顔中に広がっただけだ。田辺さんが笑った。

「あんた、顔真つ黒だよ」

そう言って、ハンカチを出してあたしの顔を拭いてくれた。そのハンカチからもイチゴの香りが漂う。

滝壺に白い泡と波しぶきが立つ。ざわめく木々と荒立つ水の音があたしを満たしていく。荒れる滝壺の周りの水面に、夜の空が映っている。世界が中に反転して存在しているようだ。私も流れ続ける滝の一部となって、あの世界へ落ちていきたい。あたしは橋の欄干から身を乗り出した。あたしは言った。

「ここから飛んでもいいですか」

田辺さんは鼻で笑って、それから少し真面目な顔をした。

あたしのことを羨ましいと言った田辺さんは、あたしがここから飛び降りたら一緒に飛ぶだろうか。それとも、橋の上から見下ろして、そういう行動ができるあたしをやっぱり羨ましいと思うのだろうか。もしくは、そんなあたしを馬鹿げていると嗤うだろうか。

か。

あたしのヒールが宙に浮く。できるだけ、足より頭が低くなるように、あたしは欄干に体重をかけ、滝壺へと顔を突き出す。

あたしは言った。

「田辺さん、一緒に暮らしませんか」

滝の水しぶきと木々の匂いのなかに紛れる、イチゴの香りを嗅ぎ取ろうとあたしは鼻を突き出し、意識を集中させる。

あたしは分からなかった。いっとうやったらせわしなく急ぎ立てる衝動が収まっていくのか。裂け続ける心はどうやったら縫合できるのか。滝壺に映る向こう側の世界に、あたしの居場所はあるのだろうか。

田辺さんは体を強張らせて、欄干を握りしめていた。